

のまま再現しようと努力した結果なのです。じつはこの本の書評は少し前に学会の機関誌に書くことになって原稿を渡したのですが、あまりに制限枚数がわずかでぼくの意を伝えきれずそのままでは著者に非礼かと気にやんでいました。そこで思いきって、いま、長々

とありたけのことを記してみたのです。きみの本書の読後感を知らせて下されば幸いです。

御興員三著『ことばと詩—英詩考そ
の—』あぼろん社、1969年。

月例研究発表要目

- 第41回 昭和44年1月11日 増谷外世嗣氏「オーデンの眼」
第42回 昭和44年2月3日 加藤二郎氏「R. ムシル——留保の態度」
第43回 昭和44年5月17日 鈴木道彦氏「フランス雑感」

編集後記

組織、制度、規約といった類いのものが、存在するがゆえに存続すべきものとされた瞬間から頽廢の芽生えがある。頽廢という言葉が気に食わないとあらば、〈健全さ〉と言いかえたっていい（事実、予算上の〈健全さ〉はそのようにして得られるのだ）。『言語文化』にしても、語学研究室にしても、その兆はないか。存在するものが存続すべきものへと淫らにかつすこやかに肥大していく無数のものなかで、せめて学術・研究を看板とする雑誌ぐらいは、両者の間に緊張を、とってまた気に食わないとあらば、ある種の *jeu* を、いつも見据えていてもよからうというのが、一編集委員の現在の偽らざる感想である。

編集の実質的な作業は、今回もまた志村俊司氏にお願いした。時間的制約のなかを、快く引き受けていただいた。ここで厚くお礼を申しあげたい。なお今年（69年度）は山田和男氏が語研を去られ、あらたに、久保内端郎、広田昌義、木山英雄、島田太郎の四氏がメンバーとして加わられた。（海老坂 記）

言語文化 第6号

1969年11月3日発行©

編集 一橋大学語学研究室
発行人

発行所 一橋大学語学研究室

東京都国立市国立

印刷・精興社